

メーリアン作『スリナム産昆虫変態図譜』における筆致・線描を中心にー

則松 夏凜

はじめに

博物画は博物学 (Natural history) という科学的研究に資するものと一般に考えられるが、その描写には極めて芸術的な側面があることは既に語られてきている。

マリア・ジビーラ・メーリアン (Anna Maria Sibylla Merian, 1647-1717) が、1705 年アムステルダムで刊行した昆虫の本、*Metamorphosis Insectorum Surinamensium* (以下、『スリナム産昆虫変態図譜』と記す) はそのような好例であろう。

本稿では、まずメーリアンという人物の芸術と科学に対する関心の源を探り、次に『スリナム産昆虫変態図譜』について詳述し、最後にこれまで十分に論じられてこなかった同書におけるメーリアンの筆致、特に線描について論じる。

第1章 メーリアンとは

第1節 絵画の修業と昆虫・植物への関心

メーリアンは、1647 年現在のドイツのフランクフルトで、銅版画家で出版業者の父マテウス・メーリアンと母ヨハンナ・カタリーナ・ジビーラ・ハイムの間生まれ育った。メーリアンは、啓蒙時代に偉大な業績を残した女性として世界的に有名で、高く評価されている。実際、生国ドイツでは 1987 年に切手が発行され、1992 年には 500 マルク紙幣にメーリアンの肖像と図版が起用され、都市の通りや学校に「メーリアン」の名が使われている。また、2017 年にはドイツにおいて新進の女性芸術家と女性自然科学者各 1 名を対象とした「メーリアン賞」はその業績を顕彰すべく設けられたものである¹。

メーリアンが3歳の時に父が没し、その後4歳の時に継父となった花の画家のヤーコブ・マレル²から水彩画を習う。アムステルダム国立美術館所蔵の《花が入った花瓶と死んだカエルの静物》³はマレルの代表作である。室内にある台の上に置かれた花瓶と、死んだカエル、頭を上げる芋虫、生けられた花と留まる羽虫のそれぞれの特徴を正確に捉えた描写、室内の空間把握と、主役の花を決定する明暗差の巧みな利用、花を艶やかに浮かび上がらせる光と影の描写からは、ユトレヒト派の画家マレルの腕の冴えが感じられる。継父マレルは、メーリアンが絵の模写を始めた時に才能を見出し、師ゲオルク・フレーゲル (1566頃-1638) とダヴィツ・デ・ヘーム (1606-1683頃) と自身の練習用版画を手本に使わせたという⁴。後にメーリアンが長じて描

く事になる花は、マレルからの学びが描画の基本となっている。

メーリアンは 18 歳の頃に芸術家のヨハン・アンドレアス・グラーフ⁵と結婚後、3 年目に娘ヨハンナを出産した。23 歳でニュンベルクに移り住み、8 年後に 31 歳で 2 人目の娘ドロテアを出産している。メーリアンは育児と研究を続けながら、油絵具と水彩絵具を駆使して花や果物や昆虫を描いていた。その傍らでは、教師として女弟子達に装飾的な花卉画⁶や刺繍の技術を教えると同時に、水に溶けない絵具を作る研究も行い生計を立てた⁷。絵画のモチーフや仕事内容は当時の需要が関係しているが、メーリアンは一貫して花や植物と共にある昆虫に関心を抱き、その描写力は水彩画や刺繍において大いに発揮されていたと言えるだろう。

一方、科学への関心はというと、4歳の頃から昆虫に惹かれ始めていたと推察されている⁸。13歳の時から昆虫の飼育を始め、ハエやクモ、芋虫の研究を始めていたという⁹。彼女の、昆虫の卵から成虫までの変態への関心は当然、『スリナム産昆虫変態図譜』に連なるものである。

さて、メーリアンの芸術と科学、とりわけ植物と昆虫への関心は大きな成果となる。28 歳の時には画家としての才能を活かして、ヨハン・テオドル・ド・ブリー¹⁰著『新しい花の選集』¹¹に着想を得て、自身で絵画や刺繍の手本書として『新しい花の本』¹²を出版した。これと同時に進行でメーリアン初の科学書『ヨーロッパ産鱗翅類 - その変態と食草』¹³も制作し、これは3連作の著書になった。そして、最後の傑作となる著書『スリナム産昆虫変態図譜』を完成させた。本書には、彼女の実際の観察に基づく昆虫の発生と変態の記録が鮮やかな図版と共に綴られ、当時の自然愛好家のみならず、後続の学者にも幅広く愛され、現代に至る。本書が人気と共に世間に与えた衝撃は、当時の自然発生説を覆す動きに拍車をかけるほどだった。

第2節 スリナムへ

1685 年、38 歳のメーリアンは母と 17 歳の姉ヨハンナと 7 歳の妹ドロテアを連れて、現在のオランダ北西部フリースランド州ウィウエルト近郊ユトレヒト市のワルタ城 (現デ・ハール城) へ移り住んだ¹⁴。ワルタ城には、城主所有のスリナム¹⁵から捕獲された昆虫の標本が度々持ち込まれていた。約 5 年にわたりメーリアンはスリナムの未知の昆虫に魅了され続け、自身で現地へ研究の旅をすることを志したという¹⁶。

1691 年、母の死後にメーリアンは娘たちとともにアムステルダムへ移り、工房を立ち上げて画業を開始した。娘 2 人に手伝ってもらい、メーリアンが過去に出版した本の挿絵を再度作っ

たり、新しく描いたりしたものを販売した¹⁷。女性が個人の工房をもつことは、当時としては稀有なことだっただろう。

1699年、52歳のメーリアンは、助手として21歳のドロテアを連れて当時オランダ領だった南米のスリナム(現スリナム共和国)へ赴いた。そして、スリナムにおいて生きる昆虫と植物を、相互関係を加味して生態系の観点から観察した。メーリアンが現地で雇ったアフリカ人奴隷と先住民の男女は、スリナムの植物研究の助けをしつつ、様々な芋虫や蛆虫を彼女に届けた。メーリアンはそれらを飼育して成長段階を記録し、小さな卵や新しい昆虫の標本を入手した際には拡大鏡を用いてくまなく観察した。そしてドロテアと2人で昆虫と植物を見たままに彩色し、生命の写生画を描き溜めた¹⁸。スリナムでの研究は5年程の予定だったが¹⁹、2年目でメーリアンは体調不良をおこし、1701年に療養のためにやむなくアムステルダムに帰った。

第2章 『スリナム産昆虫変態図譜』とは

第1節 1705年の初版について

アムステルダムに戻ると、メーリアンはスリナムから持ち帰った写生画やスケッチ、標本を元に、昆虫や植物を線描に起こした。メーリアン宅を訪れた自然愛好家は、それらを見て本の出版を急かし立てたという²⁰。初版を所有する英国のロイヤル・コレクション・トラストによると、1705年、アムステルダムでオランダ語とラテン語でメーリアンの自費で出版されたという²¹。メーリアンは持ち帰った昆虫標本や記録の数々を元に、昆虫と植物を同一の画面に描いた64枚の水彩画を完成させ、その内の60枚が銅版画になった。

印刷用に銅版に彫られた60枚の図版のうち、3枚²²をメーリアン自身が制作し、その他は3人の彫版師が行った。ピーター・スロイターは35枚、ジョセフ・マルダーは21枚、ダニエル・ストーペンダールは1枚制作している²³。娘ドロテアも着色と線描に協力した。

こうして制作期間3年を費やして完成した初版本は二つ折り版の銅版画60枚からなり、大きさは53cm×37cm、厚み約4cmの大型本だった²⁴。

書籍の図版には他人の手が入っており、線描と色彩にも彼らの解釈が入っていることも否めない。しかし、絵そのものがもつ生命力溢れる躍動感や物語を見飽きることはない。こうした点はメーリアン独自の作品がもつ魅力ゆえだろう。それを最も体験できるのはやはり原画であるが、現在はそれを実見することはできないので、本稿では銅版画の複製で考察をする。

第2節 重版とそこでの問題点

『スリナム産昆虫変態図譜』は、メーリアンの死後も版を重ねた。今日までに何版重ねられたかについて正確なところは不明だが、重版の度に特有の美しい筆使いは薄れた。文章も削除され、縮尺もずれ、無彩色の原画は元の色を知らない画家が勝手に着色し、謂わば、他人の描いた絵が混同されていった。その結果、科学的価値も暴落した時期があったという²⁵。こうして、彼女の意に反して当時の学者も批判するほど、昆虫と植物の情報が歪曲されてしまった。

つまり、『スリナム産昆虫変態図譜』の図版は初版に近いほど正確な情報で見ることができると考えられる。よって本稿では、第3版の1726年版を掲載している、岡田朝雄、奥本大三郎訳『スリナム産昆虫変態図譜 1726年版』²⁶を使用する。

第3節 『スリナム産昆虫変態図譜』の出版後の評判

(1) 昆虫学書の系譜における特長

『スリナム産昆虫変態図譜』には、メーリアンがスリナムで直に見た生命のサイクルそのものが視覚的に表現されている。このことは同書がもつ最も重要な特長である。メーリアン以前の昆虫学書における描画方法やレイアウトと比較すると、このことが明確に理解できる。

メーリアン以前の昆虫学書では昆虫だけが単体で描かれている。例えば、1653年出版のヨハネス・ヨNSTON著『鳥獣虫魚図譜』では、鱗翅目が羽を広げたものを大きさ順に並べており、その構図は昆虫標本を想起させる²⁷。

1685年刊行のヤン・スワンメルダム著『昆虫誌』では、メーリアン同様に昆虫の変態を図示しているが、卵・蛹・成虫それぞれのスケッチを同一の画面に成長順に並べ、それらには数字が割り当てられている²⁸。

このようにメーリアン以前の書物では、昆虫標本のスタイルに倣い、静止した昆虫を陳列して描くことが定石だったのである。メーリアンのように、昆虫と同一画面に植物が描かれるケースは大変珍しかった。仮に描かれたとしても、それらは単に昆虫を留める足場であり、相互関係に基づいて描かれてはいなかった。両者は自然界で密接に関係していながら、図版の中では長らく相容れない同士であった、といえる。

これに対して、メーリアンの『スリナム産昆虫変態図譜』は、昆虫の成長段階と食草を同一の画面に描く点、植物の花と果実を異時同図法的に描く点、そして、昆虫を飼育観察する新しい手法の研究に基づいており、描画は正確かつ画期的だった。このように昆虫の「暮らし」を描く描画法は、かつて無機的だった昆虫図譜に

生命の彩りを与え、以後の昆虫学者や博物学者に継承され、昆虫図譜のスタイルを決定づけた。それゆえ、後続の学者の本の各所には手本となった「マダム・メーリアン」の名前が登場するのだろう。

メーリアンのスタイルに倣った学者には、ドイツの昆虫学者のレーゼン・フォン・ローゼンホフ (Rösel von Rosenhof 1705-1759)、オランダの博物学者で図案や彫刻にも秀でていたヤン・クリスティアン・セップ (Jan Christiaan Sepp 1739-1811) などもある。また、二名法の生物分類学を確立したことで知られるカール・フォン・リンネ (Carl von Linné 1707-1778) は、生物の体系図を描く際に現物が無い時はメーリアンのスケッチを模写したという²⁹。それゆえ、メーリアンは科学の分野において語られる事が多いのである。

(2) 自然科学と芸術の融合

昆虫分類学の先駆者で「ドイツの昆虫学の父」「両棲動物の自然史学の父」と称されたローゼンホフより 60 年程も早く昆虫研究に勤しみ、後の彼にその道を歩ませるきっかけを与えることとなったメーリアンは、昆虫学のパイオニアと言える存在だ。しかも、自然科学の分野のみならず、芸術の分野においても多大な功績を残した2つの才能を持つ人物で、その名前は現代でも両方の分野において散見される。昨今の博物画研究では芸術と科学が共存するという見方が主流となっており³⁰、その典型的な例として、メーリアンの『スリナム産昆虫変態図譜』が一層注目を集めていると考えられる。

『スリナム産昆虫変態図譜』の図版は、メーリアンが昆虫研究者であると同時に花の画家として仕立て上げた集大成である。キム・トッドはメーリアンの図版に関し、「蛾のはかなさを写し取るように、線描は繊細そのものだったが、画像は芸術であると同時に科学的視点をもって描かれているように思われた。(中略) 悩ましいとさえ言えるほどの色彩の洪水と、非常にほどに実証的精密さが同居していた」³¹と述べており、科学と芸術が分かち難く結びついている事実を指摘し、芸術の観点からしても、その価値が極めて高いことを示唆している。

ウィルフリッド・ブランドは「花はしばしば愛らしく表現されているが、蛾や蝶と同等に完璧に描かれているものはまずない。マリアの描き方の特徴はこまやかな線描写にあり(中略) 陰影にはくすんだ色よりはむしろはっきりとした色を用いている」³²と、植物の描写の正確さを科学的視点から指摘しつつ、芸術的視点では描写の細やかさと鮮やかな色彩が価値を持つことを指摘している。

またデイビッド・アッテンボローはメーリアンが『スリナム産昆虫変態図譜』のために制作した図版は「色も形も大胆で、それまでの作品との違いが際立っている」³³と述べ、芸術的に非常に優れていることを指摘している。以前のメーリアンの著書の図版では「比較的抑制されていた」のに対し、同書には「異国の植物や花はねじれたり、らせん状になったり、鮮やかな色付けがされたりして力強さが感じられ、紙面からはみ出すことも珍しくない」と、メーリアンの大胆な描写やレイアウト力をよく伝えている。

さらに岡田朝雄は「この絵の優れた特徴は、(中略) 幼虫から蛹・成虫にいたる過程と、(中略) 蕾や花や実までを時間の経過を超越して同時に見られるように描いた点にある。そしてこれらの絵は、スケッチの正確さの点でも、構図の見事さの点でも、色彩のすばらしさの点でも申し分がない」³⁴と述べ、メーリアンの科学者としての観察眼の正確さと芸術家としての力量の共存を指摘している。

以上から、メーリアンの描画の特長として、図版の大胆さ・構図・色彩の鮮やかさが触れられている。しかし、これらの特長の具体的根拠について、詳細に検討した論文は、管見の限り見あたらない。次章では、メーリアンの図版の大胆さ・構図に通じる根拠のひとつとして、線描の特長について具体的に論じていく。

第3章 『スリナム産昆虫変態図譜』における線描

第1節 メーリアンの線描

『スリナム産昆虫変態図譜』の最大の特長は、昆虫や植物の特徴を正確に捉えた線描にあると筆者は見ている。しかし管見の限り、線描そのものについて論じたものはこれまでのところ見当たらない。

メーリアンの線描を一本ずつ詳細に観察してみると、線は細く小さなストロークを多用することによって成立していることがわかる。メーリアンが描く昆虫や植物のほとぼしるような生命感や躍動感は、こうした線の集積によって生じているのだろう。ここにメーリアンの独自性があると考えられる。

本章では、『スリナム産昆虫変態図譜』の図版を実際の植物の写真と比較することによって、メーリアンの線描の特長を可視化し、各図版に感じられる大胆さや構図の独自性を推察する。

『スリナム産昆虫変態図譜 1725 年版』所収の72 点の図版のうち、特に構図と線描の面白さが伝わるのは第1図《パイナップルにゴキブリの仲間》³⁵、第2図《熟したパイナップルにディド

一・ロングウィング・バタフライ》³⁶、第 15 図《スイカのつるに *Acharia* 属の蛾》³⁷である。

①第 1 図《パイナップルにゴキブリの仲間》

第 1 図は『スリナム産昆虫変態図譜』を開くと一番最初に目に入ってくる図版である。画面には葉付きのパイナップルが大きく描かれている。中央には毒々しい赤い葉が描かれ、その上にはやや左に傾いて雫型の果実が描かれている。果実と赤い葉を支える茎からは、画面下方から上方へ放射状に葉が伸びて画面からはみ出しており、エネルギー感ある絵である。ここに描かれているゴキブリの仲間は、未熟なパイナップルがやがて美味しくなることを知っているため、果実に集まり、熟すのを待ち侘びているかのようだ。

②第 2 図《熟したパイナップルにディドー・ロングウィング・バタフライ》

第 2 図では、完熟したパイナップルの果実が画面に大きく描かれている。第 1 図に比べ、円筒状に成長した果実の下部には枯れ落ちて小さくなった葉が僅かに残っている。茎を切り収穫した際の重さまで容易に想像できるほど、どっしりとした果実は今にも香りが漂ってきそうである。果実に集まる蝶は、果皮の奥から甘く香るパイナップルの蜜をすでに感知しているようだ。切り開いた果実に早く口を付けたいとばかりに、果皮に留まっている。

メーリアンはスリナムで初めてパイナップルを食し「この果実の味は、ブドウ、アンズ、スグリ、リンゴ、ナシをすべて混ぜ合わせたような味で、それらを同時に味わうことができます。香りは甘く、強烈です。この果実を切ると、部屋はこの匂いでいっぱいになります」³⁸と、味と香りの感想を詳細に記している。

メーリアンがスリナムで初めてパイナップルを食べるという体験で得た衝撃と感動は、第 1 図と第 2 図のパイナップルが他の図版よりも一層力強く、毒々しく鮮やかに表現され、しかも画面一杯に描くという大胆な手法に現れていると指摘できるだろう。

③第 15 図《スイカのつるにアチャリア属の蛾》

第 15 図にはスイカが描かれ、蔓を巡らせている。画面の下半分を埋めるほど大きく右下に描かれたスイカの果実は、グルグルと何重にも巻きながら広がる蔓を凌ぐ存在感である。スイカの果実は一部切り開かれ、そこから覗いた黄色い果肉と密集する雫型の種が、より一層目を引く。人の注目を集める舞台とも言える果実上には、右に幼虫と左に繭が留まっている。それら

の背後には、虫たちの存在を強調するかのようにスイカの蔓が時計回りの大きな円を描き、その頂上には蛾が留まっている。そして、蔓の円を囲うように正三角形に配置された幼虫・繭・蛾もまた、変態の過程が背後の蔓と同様に時計回りになっている。

メーリアンは、スイカを食した感想を「果肉はすばらしく、口の中で砂糖のように溶けます。それは健康に良くて、おいしいものです。そして病人の気分をさわやかにします」³⁹と綴っている。

第 15 図では、メーリアンのスイカの食体験とともに昆虫にも注目してもらうため、それらが描かれた画面右下に視線が行くように蔓や色が計算的に使われている。このような色使いの工夫や、蔓のような植物固有の特性を活かした視線誘導こそが『スリナム産昆虫変態図譜』におけるメーリアンの描画の特長である。

第 2 節 第 9 図《ザクロの枝にモルフォ蝶》のトレースによる考察と分析

以上みてきた全ての特長を兼ね備えているのが、第 9 図の《ザクロの枝にメネラウス・ブルー・モルフォ・バタフライ》⁴⁰（以下、《ザクロの枝にモルフォ蝶》と記す）である。

この図版は、モルフォ蝶の翅の深い青色とザクロの赤い花が互いの鮮やかさを引き立たせ、鑑賞に十分に足りうる色使いがなされている。画面下半分を支えるザクロの枝は小ぶりながらも存在感があり、枝ぶりが画面に小気味よい流動性を生み躍動感を与えている。ザクロが画面全体に対して比較的小さく描かれているにもかかわらず、画面に確かな効果を生んでいるのは、それが単なる蝶の足場で済まされていないことを物語っている。それゆえ、本節では《ザクロの枝にモルフォ蝶》をトレースすることによって詳細に論じ、メーリアンの描画の特長を明らかにする。

①トレースによる考察と分析

《ザクロの枝にモルフォ蝶》の図版からのトレースを各種作成し、目視での比較によってメーリアンの線描を可視化する試みを行った。メーリアン作《ザクロの枝にモルフォ蝶》をトレースした（図 1）と、筆者が撮影したザクロ⁴¹の写真のトレース（図 2）を用意した。



（図1）《ザクロの枝にモルフォ蝶》のトレース、筆者作成

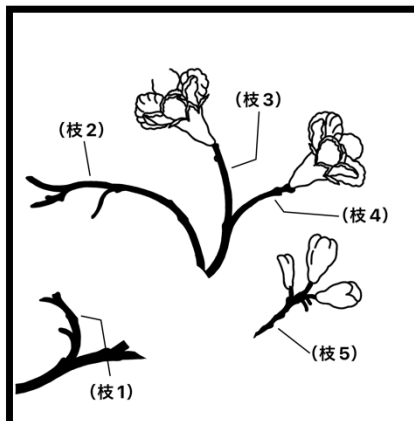


（図2）ザクロの写真のトレース、筆者作成

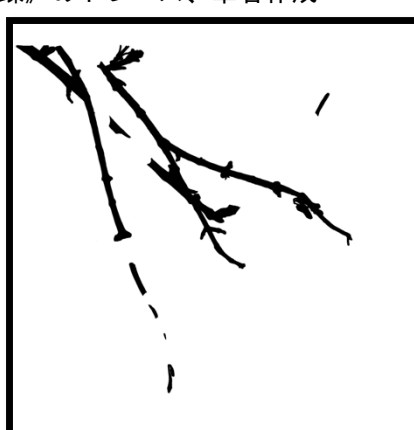
まず（図1）の枝が上向きに対し（図2）は下向きになっているが、筆者が撮影した際に果実のある枝が樹木の頂点付近にしかなかったためであり、全ての果実付きの枝が下に向いている確証はない。しかし、自然界に本来ある姿を理解した上で、メーリアンがどのような作画意図をもって表現したかについて考察するために、この比較検討は有効だと思われる。

まず、最も目を惹く果実を比較する。（図1）の果実は枝の上面に成っているが、（図2）の実際の果実は枝の下面に成っている。果実は成熟の際に自重によって下向きに垂れ下がるためである。メーリアンは果実の姿がよく理解できるように敢えて上面に描いた可能性がある。

次に、（図1）は（図2）より枝がしなやかに曲がっていることに気づく。双方の枝の線描に注目すると、その違いが顕著である。（図3）の枝はほとんど全て大きく湾曲しているが、（図4）の枝は全て直線に近い。この点において、メーリアンの線描の特長と描画における意図が現れている。



（図3）枝の抽出、《ザクロの枝にモルフォ蝶》のトレース、筆者作成



（図4）枝の抽出、ザクロの写真のトレース、筆者作成

（図3）の湾曲した枝は、左下の根本付近の小枝（枝1）、果実を起点に上方向へ三又に分かれる枝（枝2、枝3、枝4）、果実を載せる為の右方向へ伸びた枝（枝5）の5本がある。これらの枝は無作為に描かれているわけではなく、意図的にそれぞれの位置関係を計算した上のものである。

（枝1）と（枝2）は今にも交差しそうだが、この絵では唯一、円を作り上げている。根元から右方向へ枝を辿ると、（枝2）によって再度根元へ連れ戻される。（枝1）、果実、（枝2）の三者を反時計回りに延々と辿る仕組みが完成しているのだ。トレースでは昆虫を省略したが、本来は果実に蛹、（枝2）に幼虫が留まっているため、以上の画面左側の視線誘導によって変態の過程も追えるように描かれている。これに関して、第15図⁴²のスイカの中心右側の円を巻く蔓にも同様の作為が確認できよう。こちらでも時計回りの円の周辺に幼虫・繭・成虫が蔓を辿って配置され、昆虫の変態過程が完結している。

（枝4）と（枝5）は、右方向へほぼ並行に伸び、それぞれに花と蕾を描き違いを見せている。また、各方向へ散乱する（枝1）・（枝

2)・(枝4)・(枝5)を纏めてバランスを保つ枝の脊柱が(枝3)である。(枝3)は、(枝1)とほぼ並行に伸ばすことで統一感を得ている。このように、全ての枝が確かな役割と相互関係を持って描かれている。枝は見る側の視線を誘導しつつ、昆虫の変態や植物の開花前後の経過を示しているのである。つまり、メーリアンは植物を図説の矢印のように使っていると言える。同時に、矢印の役割を持った枝は絵全体を見た時に流動性を感じさせ、結果として植物の躍動感を演出する仕組みにもなっている。

(図1)の果実の配置も見事で、割れた裂け目と輪郭も全て枝の流れに沿っていて阻害しない。ここからも、メーリアンの芸術家としての力量が強く感じられる。

葉の表を見せ、虫食いや枯れた部分も嫌厭せず描く点は博物画に共通しているが、その振れた描き方はメーリアンの特長と考えられる。この振れは、大胆に湾曲した枝に比べて小さな湾曲を見せている。葉の芯を一本の線としてみると、枝線から小さく分岐した曲線であることがわかる。そこに肉付けされる葉の先端は捻れたりうねったりして、その動きには科学的正確さを越えた遊びが一層感じられる。こうした点こそがメーリアンの線描の妙であり特長である。

②伝統の超克と継承

大きく裂けた果実の果皮が、下から上へうねる様に外側へ広がっている点や葉先が捻れている点においては、先述のヨハン・テオドール・ド・ブリー著『新しい花の選集』の第1図《ヨウラクユリ(Lilium persicum)》⁴³などに似た筆致を見ることが出来る。メーリアン以前の標本や図鑑では、花・実・種などをパーツごとに分けて図式的に描かれているのは当たり前のことだった。しかし、メーリアンは生き物が本来あるべき自然から切り離されて実際に生きている環境や、生態の情報が疎かになっていることに疑問を持っていた⁴⁴。そこで、彼女は独自に生息環境や生態の再現を『スリナム産昆虫変態図譜』において試行したのである。

《ザクロの枝にモルフォ蝶》において確認された植物の成長段階という本来、時の経過によって生じる変化を一枚に納めるという手法は、異時同図法という絵画でよく見る手法に近似している。現存する花卉画でメーリアン最初期の一点《ザクロの木とヒメアカタテハ》⁴⁵においても同一の手法を採用している。地面から伸びる一本の若いザクロの木に花と果実、根元には芽と熟して落ちた果実を描きこみ、成長段階を一枚の絵で表現し切っている。メーリアンは幼少の頃から昆虫の変態に興味を抱いていたが、そ

の関心は植物にも等しく向けられていたことが確認できる。

花を重ねず描く点は17世紀以降の花卉画の伝統に共通しており、マレルから学んだ絵画が元になっていると考えられるが、そこに寓意をも意識的に込めているかについては定かではない。この点については今後の課題としたい。

おわりに

以上みてきたように、博物学や昆虫学などにおいての貢献が指摘されてきた、メーリアン作『スリナム産昆虫変態図譜』の図版を作品として扱い、線描を中心にその芸術性を具体的に検討した。自然科学の分野で歴史的業績を挙げた同書は、当時の博物画を代表するほどの図版を所収するものとして有名であるにも関わらず、既往研究では図版における描画の大胆さ・構図・色彩の鮮やかさが触れられているものの、これらの具体的根拠についての詳細な検討はされてこなかったからである。

《ザクロの枝にモルフォ蝶》のトレースによる考察と分析の結果、メーリアンは自然界に本来ある植物や昆虫などの姿を正確に理解した上で、明確な作画意図をもって表現していたことが明らかになった。その意図とは、蔓や枝などの植物固有の特性を活かした線描を主体とした視線誘導によって、植物や昆虫などの成長段階における変化を鑑賞者に理解させるというものである。しかも、これらは一枚の図版において完結するという、メーリアン以前の博物学の図版には見られなかった手法である。

異なる時を一枚の絵に納める異時同図法は伝統的に絵画で採用されてきた方法である。一方、メーリアンの筆致にはヨハン・テオドール・ド・ブリー著『新しい花の選集』に共通点が見られること、技術にはヤーコブ・マレルの花卉画が元にあるなど、メーリアンの画家としての修練の結果も確認できた。また、《ザクロの枝にモルフォ蝶》の葉の描写に見られた科学的正確さを越えた遊びとも言える表現は画家ならではのものと言えるだろう。つまり、『スリナム産昆虫変態図譜』には、メーリアンの画家としての力量が存分に発揮されていた、と指摘できる。

メーリアンの図版を芸術の観点から分析し検討した結果、『スリナム産昆虫変態図譜』がそれまでの博物画の意義を越え、芸術性を獲得した理由が具体的に明らかになった。科学と芸術の分野を跨ぐ博物画を芸術的視座から検討することによって、さらに新たな芸術表現を探索することができるだろう。

- ¹ 岡田朝雄「訳者あとがき」マリーア・ズィビラ・メーリアン（岡田朝雄、奥本大三郎訳）『スリナム産昆虫変態図譜 1726 年版』鳥影社、2022 年、p. 178。
- ² Jacob Marrel (1614-1681)。ドイツ生まれ。花の絵を専門に描き、内容は花と昆虫の寓意画だった。
- ³ 1634 年、40.3×31cm、パネルに油彩。RIJKS MUSEUM <https://www.rijksmuseum.nl/nl/collectie/SK-A-772> (2023 年 6 月 27 日閲覧)
- ⁴ ヘムート・デッケルト「芸術と学問のはざま～マリーア・ズィビラ・メーリアンの業績～」メーリアン前掲書 (1) p. 156。
- ⁵ Johann Andreas Graff (1637-1701) ドイツのニュンベルク生まれ。画家、銅版彫刻師。詳細については不明。
- ⁶ 花の静物画。
- ⁷ キム・トッド『マリーア・シビラ・メーリアン 17 世紀、昆虫を求めて新大陸へ渡ったナチュラルリスト』屋代通子、みすず書房、2008 年、p. 74。
- ⁸ キム・トッド前掲書 (7) pp. 39-40。
- ⁹ デイビッド・アッテンボロー『すごい博物画』笹山裕子、グラフィック社、2017 年、p. 140。
- ¹⁰ Johann Teodor de Bry (1561-1623) フランス生まれ。メーリアンの母方の祖父で、フランクフルトの有名な出版業者である。
- ¹¹ *Florilegium Novum*, 1612 年初版出版。17 世紀に図案や意匠の手本書として重宝された。『新しい花の選集』の第 1 図は以下のリンクから確認できる。
Biodiversity Heritage Library
<https://www.biodiversitylibrary.org/item/216976#page/7/mode/1up>
- ¹² *Neues Blumenbuch*, 1675 年初版出版。
- ¹³ *Der Raupen wunderbare Verwandlung und sonderbare Blumennahrung*, 1679 年と 1683 年に 2 巻に分けて出版。3 巻目は 1717 年、メーリアン死後に出版。
- ¹⁴ ヘムート・デッケルト前掲論文 (4) p. 157。当時、ワルタ城はラバティ派の拠点で、約 350 人が住む生活共同体だった。
- ¹⁵ ウィルフリッド・ブランツ『植物図譜の歴史 ボタニカル・アート: 芸術と科学の出会い [新版]』森村謙一、八坂書房出版、2014 年 5 月 (初版 1986 年)、p. 133。当時はイギリス・フランス・オランダ領ギアナに分かれている。
- ¹⁶ ヘムート・デッケルト前掲論文 (4) p. 158。

- ¹⁷ サラ・B・ポメロイ、ジェヤラニー・カチリザンビー、Kohtaroh “Yogi” Yamada『マリーア・ズィビラ・メーリアン 蟲愛する女 芸術家 | 科学者 | 冒険家』中瀬悠太、エイアンドエフ、2022 年、p. 77。
- ¹⁸ サラ・B・ポメロイ他、前掲書 (17) p. 101、pp. 107-109。
- ¹⁹ サラ・B・ポメロイ他、前掲書 (17) p. 123。
- ²⁰ サラ・B・ポメロイ他、前掲書 (17) pp. 129-131。
- ²¹ ROYAL COLLECTION TRUST
<https://www.ret.uk/collection/1085787/meta-morphosis-insectorum-surinamensium> (2023 年 5 月 31 日閲覧)
- ²² ヘムート・デッケルト前掲論文 (4) p. 160。メーリアンが作製した作品は第 11 図《コーラルビーンツリーとヤマユガ》第 14 図《サワソップにスズメガ》第 35 図 (作品名不詳)。
- ²³ ヘムート・デッケルト前掲論文 (4) p. 160。
- ²⁴ 1726 年出版の第 3 版では、メーリアンの要望でワニや蛇など新たに 12 点の図版が追加された。
- ²⁵ キム・トッド前掲書 (7) pp. 250-253。
- ²⁶ メーリアン前掲書 (1)。
- ²⁷ 桑木野幸司、菅靖子『自然という書物 -15～19 世紀のナチュラルヒストリー&アート-』町田市立国際版画美術館、2023 年 3 月、p. 66。
- ²⁸ 桑木野幸司他、前掲書 (27) p. 68。
- ²⁹ キム・トッド前掲書 (7) p. 12。
- ³⁰ 主な既往研究には、ウィルフリッド・ブランツ『植物図譜の歴史 ボタニカルアート 芸術と科学の出会い』森村謙一、八坂書房、2014 年 (初版 1986 年)。高階秀爾「絵画における博物画の位置-見世物・自然探求・装飾鑑賞」生き物文化誌学会『BIOSTORY』vol. 28、誠文堂新光社、2017 年、pp. 7-9。西野嘉章「「植物画」は果たして絵画芸術なのか?」同上誌、pp. 31-35。
- ³¹ キム・トッド前掲書 (7) p. 7。
- ³² ウィルフリッド・ブランツ前掲書 (15) p. 133。
- ³³ デイビッド・アッテンボロー前掲書 (9) p. 174。
- ³⁴ 岡田朝雄前掲書 (1) p. 178。
- ³⁵ メーリアン前掲書 (1) p. 11。第 1 図を下記のリンクから確認できる。
Biodiversity Heritage Library
<https://www.biodiversitylibrary.org/item/129308#page/12/mode/1up>
- ³⁶ メーリアン前掲書 (1) p. 13。第 2 図を下記のリンクから確認できる。

Biodiversity Heritage Library
[https://www.biodiversityli-
brary.org/item/129308#page/15/mode/lup](https://www.biodiversitylibrary.org/item/129308#page/15/mode/lup)

³⁷ メーリアン前掲書 (1) p. 39。
第 15 図を下記のリンクから確認できる。

Biodiversity Heritage Library
[https://www.biodiversityli-
brary.org/item/129308#page/54/mode/lup](https://www.biodiversitylibrary.org/item/129308#page/54/mode/lup)

³⁸ メーリアン前掲書 (1) p. 12。

³⁹ メーリアン前掲書 (1) p. 38。

⁴⁰ メーリアン前掲書 (1) p. 27、第 9 図。

⁴¹ 筆者が撮影したザクロは、メーリアンが描いたザクロとは同じではない可能性が高いことを注記しておく。

⁴² 注 37 を参照。

⁴³ 注 11 を参照。

⁴⁴ サラ・B・ポメロイ他、前掲書 (17) p. 90。

⁴⁵ 1665 年ごろ。サラ・B・ポメロイ他、前掲書 (17) p. 40。

Artistic Technique in Merian's *Metamorphosis Insectorum Surinamensium* - Focusing on Line Work-

NORIMATSU Karin

Natural history illustrations are generally recognized for their contribution to scientific research in the field of natural history. However, these depictions also possess a significant artistic aspect. Among them, Anna Maria Sibylla Merian's (1647-1717) publication of *Metamorphosis Insectorum Surinamensium* in 1705 stands out as a prime example.

The methodology employed involves a visual comparison of Merian's illustrations and photographs. In particular, we focus on Merian's illustration titled "Pomegranate and Menelaus Blue Morpho Butterfly" to examine its characteristics in terms of line work. To eliminate non-line information, the following procedures were conducted. A photograph of the same type of pomegranate was used, and both the illustration and photograph were traced using lines of consistent thickness. The resulting traced image of the illustration is referred to as Figure 1, while the traced image of the photograph is referred to as Figure 2. Following these steps, Figures 1 and 2 were visually compared to analyze the distinctive features of Merian's line work. As a result, it can be observed that Merian's illustrations contain shapes that do not exist in reality, enhancing their artistic qualities. Additionally, it became evident that elements in Merian's line work can be traced back to the floral illustrations of her stepfather Jacob Marrel and the ownership of her father, Matthäus Merian, who possessed Johann Theodor de Bry's *Florilegium Novum*.